

て、饅頭買うて、散財して来るぞとて、得意げなり、城崎につきしは八時過ぎなりき。

十一日には來訪の郷紳に接して一日をくらしつ、晩に近き頃、又温泉寺の藥師堂に詣で、堂中に藏められたる湯島四所明神の神像を拜す彫刻はいとあら／＼しきものなれども、時代は古かるべし、山門のほとりにて、杜鵑のなきて過ぐるを見たり、極樂寺といふに過ぎりて、稻嶺蕭白などの畫ける袈裟を見る、例の疎宕なる墨畫なり、兆殿司が畫ける開山畫像といふ者あ

れど、縑素殘破して辨すべからず、曼陀羅湯の前をすぎ、御所湯といふに浴して歸る、明日は余も蓄堂と同じく迂路より天橋立を觀て歸途につかんことに定め、中村君もその用事をはりて直ちに神戸に歸らんこと、定まりぬれば、この夜は主人の挑洲、その細君、妹のきみなど、皆いで、忠實にもてなざる、又郷紳の求めらるゝまゝに燭をかゝげて便面に惡札をふるふこと十餘通なり。

紀州山間の温泉

山 本 勝 市

一、湯峰温泉と川湯温泉 場所は紀州熊野の山奥、行政區域でいへば和歌山縣東牟婁郡のうちで、四村大字湯峰と請川村川湯とにある。山一つを距てた隣同志、前者は硫黄泉、後者は炭

酸泉だ。古く國史に見えた熊野の湯でありながら今は不使なので却つて世に知られて居ないが稀な良い温泉で、無色透明、その質、その量及び其熱に於て、ひとり四國の道後に比すべくで

あらう。山陰の各温泉の如きはまるで問題にならない。

近頃大和アルプスを越えて行く學生が時々あるがこの方は、とても道が峻しい。先づ普通は新宮といふ思想的に新しいとはいはれてゐる町（必しもさうではない）から熊野川（一名音無川）を九里八町、日本にあまり數のない、プロペラ船といふべき飛行機のエンヂンの右手を艦につけた船で上る、一里位遠くまでバタ／＼（音）が聞える位だから初めてのものには、少々やかましいが、併し速度が非常に速いのと、途中の景色が素敵なのとで、乗心地はさまで悪くはない。

温泉場につけば可成の宿はある、可成の御馳走も出る、併し何をいふても三十戸にも足りない程の村で、而かも所が紀伊山脈の分水嶺に近いと来て居るのだから、人工的な娛樂設備といったものは何一つない、芝居も、活動も、電氣も、牛乳も、藝者も、仲居も、全くない、そんな所だから土地の風俗習慣等には随分古い面白

いものがある、先づ内地では残された唯一の別天地といひ得るであらう。夏ならば村娘達の奇妙な盆踊りも見られる、將來紀勢鐵道が完通すれば此所もやがては山陰北陸の温泉地の様に俗化は免かれぬであらう、今のうちに是非一度は行つて、俗腸を洗ふて置くに限る、おすゝめする。

猶行つた序に見落してならぬ所は、

○瀨峽（八丁）へ約四里、船の便がある

○那智の瀑布 山を越ゆれば近いが峻岨だから一旦新宮へ歸つてから行く方がよい

○熊野權現 湯峰のすぐそばの本宮と新宮との兩地にある、共に官幣大社

猶、湯峰温泉の附近には内務省の天然保存植物になつてゐる、天下に類のない一種の羊齒がある、その方面の研究者にも見おとせぬものゝ一つであらう。

二、龍神温泉 和歌山縣日高龍神村にあつて

日高川の上流龍神村龍神湯の山の崖下なる岩窟より湧出する炭酸泉である。現今の浴場は近年の改築に係り、上下二棟山に倚り水に臨んで構てゐる。湯槽の裡、坐して前山の雲烟を望むべく、又流に従ふて下す筏を俯瞰すべき好風景の地で、旅舍十戸悉く浴場の北に櫛比し、規模の壯設備の完共に山間の地には想像し得られぬ。未だ海岸の何れに向つても一貫せる車道のないが遺憾であつて、田邊から十二里、高野山がら

伊豆の温泉

中村新太郎

伊豆は新舊幾多の火山群より成る半島である。従つて山巒は重疊し平地に乏しく海岸は良き交通路を作るに困難である。半島であるが爲めに表日本の大道からは離れて居るし、南方太平洋に突出して居るから氣候は溫暖にして、温

も略同じ位で、近頃高野山から自働車を運轉するの說があるが前途尙ほ遑遠であらう。

泉質は炭酸泉、無色透明

湧出量一時間二九七五リットル

溫度攝氏四五度

一浴の氣持好いことは請合うから、一つ健脚の諸君が山中避暑を計畫さるゝならば、是非行つて此の言の眞偽を試みられたい。

潤で樹木と羊齒類に富んでゐる。此等の要素は伊豆をして殆んど島に似た人文を發達させた。史上に觀るが如くに伊豆は字義通りの半島であつた。今では道路も開け殊に交通機關としての自働車が其の能率を發揮するから三島から熱海